

オリーブの樹

第20号

2003年1月31日

شجرة الزيتون

早期積放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



奥入瀬 MIE

目次

- P 3 独居より① 重信房子
- P 6 プリズナージャーナル⑩ 重信房子
- P15 東アジアの地殻変動と溶解する日本資本主義 カラス天狗
- P18 重信さんとの交流コーナー 今年の抱負など
- P22 投稿 死刑囚故永山則夫の基金でペルーから働く子供が来日 小林忍
- P19 シゲに捧げる「私小説」その18 山田美枝子

重信房子さんを支える会



2002.11.19.

とも
 旧友が来る一歩一歩と踏みめぐ
 生き、マ会えると思わさるよ、ともよ

ともよ

独居よい⑩ 12月26日～1月3日

「オリーブの樹」19号を読んで

重・信 房子

新年を迎え、旧年中の支援協力に感謝します。「オリーブの樹」19号が年末休みの前、去年の12月26日に入手できました。ありがとうございます。以下、年末年始の独居の有様です。

12月26日 明日27日で、仕事納めに入るので、なんだかばたばたとしています。差し入れの品が、友人たちから届きました。支える会のWさんからは唐辛子2袋。「今年は甘すぎたぞ！辛めに来年は頑張ってください！」というメッセージでしょうか。ありがとう。ワッフルやみかんに花をAさんありがとう。Uさんからは、体調のせいで差し入れに來れない分、カンパを送っていただきました。ありがとう。娘からのクリスマスカードや大福も届きました。また、資料、「オリーブの樹」他に、リサイクル図書の「いきいき」「旅」「ボザール」、1年前のもですが、届きました。ありがとう。面会に向かう廊下の片隅に、横向きのミニ門松が置かれています。仕事納めの明日正面を向くのでしよう。

19号、「オリーブの樹」の表紙は、私の送った絵でした。絵と共に挨拶も送ったのですが大きすぎたのかもしれない。今年、様々の心遣いへの感謝と、来年の戦争の時代の先の希望を見据えて、まっすぐに進みます、と改めて、今年の挨拶を記します。

「オリーブの樹」19号を読んでいるところです。全中東「民主化」市場経済化計画として、カラス天狗さんの書かれている「国防政策委員会」の内容は、これまでのブッシュ政権が「反テロ」戦争の名でやり始めた中東支配「民主化」市場経済化が、明確に表明されたものでしょう。私の元には、資料そのものはないですが、ブッシュ政権が「決断し、行動する」以上、こうした内容として、構想されていた筈です。パレスチナ問題に関する共和党案は、レーガン時代にも、ヨルダンとの連邦案を、イスラエルと協議の上発表したものです。ポスト冷戦のグローバル時代帝国主義の植民地支配へと先祖返りの横暴さが明らかになっています。「査察」がどうあれ、イラクに対する攻勢は、アメリカの世界支配秩序、とりわけその要の中東支配にとって抑え込まなければと傲慢にも、「民主主義」の名において考えているようです。アメリカのブッシュ政権は、我力に屈する者には地位と物質的富と生存の可能性を与えてやる、という人間を下劣に愚弄した哲学によっています。数世紀も前の野蛮なキリスト教十字軍の性格を剥き出しにして、世界を混乱へとおとしこめるでし

よう。アラブ民衆の意思、キリスト教を価値観としてきた人々、特に西欧の人々の良心と良識が試されつつ、「国益」の前で、日本や中国やロシアがどこまでアメリカ政府に呼応するのでしょうか？

アメリカ政府と紐帯で結ばれたシャロン政権は、1月の選挙の圧勝を狙い、イスラエルの人々、パレスチナ人にも、戦争と排外主義を煽りつけています。ブッシュ政権の描いた中東の図は、湾岸戦争後に、世界秩序形成の突破口とした91年のマドリッド中東和平テーブルの総括として、「パレスチナや、アラブに、対等なパートナーの位置を与えるのではなく、我々の決定に従う強制力こそ平和だ」と考えたのでしよう。

それはブッシュの父の時代と同じスタッフ、ブレーンによって、打ち立てられている現ブッシュ政権での「信念」のようです。アメリカ、中東、西欧、そしてアジアの民衆による反戦の力で、彼らの十字軍のごとき「使命感」にのぼせた侵略と植民地支配に対して、有効な平和包囲を対峙したいものです。

交流コーナーで、前村さんが公判の傍聴の感想を述べておられます。70年代当時、「イスラエル」と括弧でくくり、国としては認めていない時代です。74年のミニパレスチナ国家案の頃も、前村さんは知っておられるようです。リッダ闘争とミュンヘンオリンピック襲撃は、評価はどうあれ、特に、欧州、非同盟諸国の政治イニシャチブを作り出しました。「なぜ闘うのか？」「パレスチナ問題は、欧州のユダヤ人問題の責任と表裏ではないのか？」その時代、日本でも74年6月かアラブ作家会議の人々が訪れ、「ミニ国家反対！」と訴える人々が会場に乗込んで、ヨセフシバイエジプト文化大臣（後にキプロスで暗殺された）をつるし上げ、詩人ダルウィッシュが対話を続けた話を聞いたことがあります。74年11月のPLOアラファト議長の出席、その後の国連へのPLOオブザーバー参加、PLOの認知へと進みました。

プロパガンダの最高形態として位置付けられていた武装闘争は、政治闘争へと転換しながら行った時代です。

ちょうど、公判で問われている70年代の頃と重なります。PLOの東京事務所（駐日パレスチナ代表部）形成に、私たちが積極的に賛成しました。ミニ国家路線や政策への反対ということと、ミニ国家案を推進しようとするアラファト批判を持ちつつ、PLO東京事務所設置を支持することを国内の連帯運動に良く伝えきれていませんでした。また、PFLPのミニ国

プリズナージャーナル⑱

重信 房子

第24回公判出廷記 12月20日 — 第2回丸岡証言

地裁への道すがら

明け方が遅く、日の出が6時45分くらいなので、冬至を2日後にひかえて、起床時間7時まぎわまでうす暗い。東雲がブルーと山吹色の縞模様徐徐に変化していきます。美しい明け空です。

前回15年ぶりに丸岡さんに会えたのですが、今日の法廷も丸岡さんの証言が続きます。寝床からうす明りの射しはじめた空を見て、寒さのなか意を決したようにはね起きて、起床前の準備。空の美しさにみとれながら、なぜか闘って戦死した同志たちを思い出しています。日本人もアラブの友も。丸岡さんに会うせいでしょ。

起床のチャイムにあわてて出廷の準備。

師走の暮れも押しつまったせいなのか、今日の女性の出廷は少し多めの7人。防寒のしっかりした準備の人が多いです。私は厚手の下着上下を着こんで、ズボンスーツでしたが、ダウンロングコートで防寒した人もいて、大型バスの後方に乗りこみました。前方に男性が乗りこんで8時に出発して門を出ました。

空は青く、晴天。高速に入ると、荒川土手に10人くらいずつさまざまなスポーツトレーニングなのか、走ったりかたまりになって、射しはじめた冬の陽の下で体を動かしています。荒川を渡ってすぐ高速から堤通りへと、一般道への道に護送車は降りはじめました。車内の女性たちはみな顔を見合わせてニコリ、「ヤッ！」と小さい声をあげています。みな一般道を通って街の様子に触れるのが嬉しいのです。すでに制服の係員はあちこちでこっくりこっくりと寝ています。

堤通りへと隅田川を渡り、川をはさんで高速道路と並行して走ります。前回11月の一般道と同じコースです。11月には鮮やかな黄色の銀杏が常緑樹と美しいコントラストをなしていた航空高専や石浜神社の脇の数本の街路樹が、ハナミズキなのか梅モドキなのか、真っ赤な実をつけて、朝の冷えた空気の中で一番の陽を浴びて光っています。石浜神社のみごとな寒椿が濃いピンクの花をつけています。

隅田公園沿いに護送車が進んでいくと、高速から遠くにいつもは「ホームレス」の鮮やかなブルーのビニールハウスが見えている対岸ですが、今日はブルーのハウスのそばを通りますが、逆によく見えません。寒椿はきれいに多すぎる花をつけています。ふと見ると

八つ手の白い花が道路際に一本大きな枝振り咲いています。キョロキョロ花に見とれつつ、葉の落ちたプラタナスの街路樹脇から言問橋を西に折れて、浅草の商店街を経て、カップ道具街通りを、菊屋橋・上野へ。出勤の人々の波がだんだん増えて、寒いなか足早に歩いています。アメ横も師走の時期のせいか車も多く、店を開けているところもあります。

神田を経て大手町に来ると、通信博物館の道路を隔てた反対側のパブリーなビルの前に、大きなヒマラヤ杉がそのままクリスマスツリーのデコレーションです。しかも木の根元の10メートル四方くらいは雪で固められています。少し風があり、飾付けられたクリスマスツリーの枝や飾りがふわふわと揺れています。その大きさにびっくりしながら、護送車から初のクリスマスツリーを見物。大手町の名物なのか？大手町はパブリーな町並になってしまっているな……と思いつつ眺めています。ツリーをこえて右折すると堀が見え、パレスホテルのあたりでカーテンが降りて、地裁へ9時前に到着。

山本控訴審の結果を聞く

午前中、大谷弁護士が面会にみえて、直前に終わった山本控訴審の結果を知らせてくれました。判決は検察・被告双方とも棄却となったとのこと。同じ事件の主な役割を果たした“主犯”の人は、1975年に1年半の刑を執行猶予3年の判決を受けていました。その手助けをした山本さんが2年6ヶ月、執行猶予5年ではあまりに重いという量刑不当の被告弁護側控訴だったのに、検察側は実刑を要求して控訴していたものです。

私が同事件で公訴されており、私の量刑を増やすために山本さんの実刑を画策したものでした。検察側の9・11以降に乗じた実刑要求はあまりにひどく、これが通るなら「司法の正義」など法律を無視し、政治判断が優先されるものとなっていくでしょうと言われていました。検察側の思惑は棄却されました。それは良かったのですが、弁護側の量刑不当の控訴が、両成敗風に棄却されたのは残念です。

丸岡さんの入廷

13時15分、104号法廷に入りました。私の手

錠を解くと、傍聴人の入廷がうながされました。師走の多忙のなか、大学、高校の友人たちや、旧友のみなさんありがとう。丸岡さんの旧友たちも多くいるようです。素敵な美しい人が最前列の友人たちの隣に座りました。あちこちから彼女を指さして「イ・モ・ウト」と口で、何人かが同じように知らせてくれます。

「えー！」丸岡さんの妹さんだとわかりました。「あ……この人か……」なんだか、なつかしい人に会うようで、立ちあがって一礼しました。

丸岡さんが照れながら自慢していた妹さんです。スチュアーデスになりたいからって、NHKの英語講座で勉強して何級かに合格して、兄貴であるボクより優秀なこと。しっかり者であることなど、どれほど妹を愛しているか、照れ屋の丸さんの情をこめたもの言いを思い出しつつあいさつしました。みな着席しました。みんな座ってしんとしていますが間が空いてしまいました。丸岡さんの登場はまだです。

「証人の準備ができ次第始めます」と裁判長が言い、数分待ちました。ドアの一角に気配がして傍聴席のすべての瞳がドアに注がれます。音をたてながらドアが開いて、ニコニコ顔の丸岡証人が入廷しました。旧友も妹さんもみんな手をあげたり、顔一杯でうなずき合ったりと、一気に緊張した法廷の空気が変わります。

丸岡さんの厳しい体調

「前回にひきつづき丸岡証人ですね。前回の宣誓は生きていますので、それでは」と裁判長がうながして、虎頭弁護士の尋問がはじまりました。

「椅子の高さはそれで好いですか？」虎頭弁護士が証言台まで来て、のぞきながら尋ねました。前もって丸岡さんから、心不全の病人である彼にとって、104号法廷の椅子が高く、備えつけのパイプに足をかける形になるので、足に血が降りたまま上がってこず、脳や心臓の方に血が回りにくくなるので、床に足をつけられる椅子に変更できないかと要請されていました。そのことを弁護士が確かめたのです。「はい、大丈夫です」と、元気そうに丸岡さんが答えてはじまりました。

虎頭弁護士「それでほかがいいます。東拘に移管されて、前回の公判当日まで点滴を受けていたとのことですが……」

丸岡証人「前月の29日までです」体調が悪く、車椅子で出廷している様子を心配しました。

弁護士「今日はどうですか？」とたずねると、肺炎の後遺症で気管支炎があるが、血液検査も良好なので問題はないと答えたので、質問に入りました。

弁護士「Yさんを知っていますか？」



丸岡「はい」
弁護士「Yさんはボランティア外国人の受け入れ窓口として、国際関係委員会という部局があり、ここが配属先を振り分けると、前回あなたは証言しているが、あなたの言う Foreign Relation Committee と同じでいいの？」と前回にひきつづいてPFLPの中のボランティアや、さらに「アウトサイドワーク」と呼ばれていた機関の位置や、当時の条件についての質問が行われました。

法廷に入ってきた温度差などの作用か、始まってすぐ丸岡さんははげしく咳きこみました。被告席から「水を！」と、私も思わず声が出てしまいましたが、置かれた水さしに手をかけたけれど納めて、「スミマセン、ちょっと」と、体調が部屋になじんでいなかったようです。すぐ治まりました。

PFLPの「アウトサイドワーク」

東拘で風邪から肺炎をこじらせて生命の危機に陥って以来、きびしい体調にあるのを、目の前の丸岡さんから知るのなんとも辛いものです。本人はケロリとして証言をつづけています。

弁護士「当時のPFLPにおける『アウトサイドワーク』の仕事とはどんなものか？」

丸岡「被占領地外の作戦全般、さらに遊撃戦展開、たとえばリッグ闘争みたいなものとか、海からアクアラングを着けて侵入する作戦とかを引き受けていた」

そして当時「アウトサイドワーク」の本拠地であった場所としては、レバノン、イラク、アルジェリア、イエメン、ソマリア、ウガンダなどがあげられました。当時モサドの暗殺リストのトップにおかれ、CIAからも狙われていたので、ドクター（アブハニのこと。彼は医学博士だった）が場所を変えつつ指揮していた状況があったと語られました。

弁護士「PFLPの最高機関は？」

丸岡「最高決議機関という意味なら党大会ですが、最高の執行機関ということなら政治局です」

弁護士「『アウトサイドワーク』は、政治局の下にあるのか？」

丸岡「形式的にはそのとおりでよろしいです」

弁護士「アウトサイドワークの作戦や行動は政治局の承認のもとに行われるのか？」

丸岡「承認を得て行なう場合もあるし、得ずに遂行されることもあった」

弁護士「承認を得られなくても作戦を実行するケースがあるんですか？」

丸岡「はい。秘密が敵に漏れては困る場合、後で承認受ければ良いだろうとドクターが判断した時」

弁護士「政治局の方が了解しないだろうと思われるケースとは？」

丸岡「国際的に非難を受けるとか、アラブ人民の支持が得られないようなもの。つまり、目標が不明確で、身代金目的とか、金に関わるような場合。相手が帝国主義であれば構わないという声も多いのですが、金を取るというのは、イスラム社会ではタブーで支持されないで」と、当時のアラブの社会状況が説明されました。

アラブ各国の身代金要求に対する考え方の違いを聞かれ、イスラムの戒律にとらわれない国は、卑近な例でいえば、飲酒を認める国。そういう国では、敵からの身代金を取ることをかまわないとする考えが多く通用していた。具体的には、共和制の国。エジプト、レバノン、シリア、イラク。加えて、モロッコは王制国でもゆるやかだった。反対に、コーランでは銀行利子も禁止されているので、サウジアラビア人に対しては銀行の利子をつかない。モロッコ以外の王制諸国や、新風主義でも戒律のきびしいリビアなどでは、イスラ

ムの法によって、身代金を取るなどはきびしく批判されていた、答えていました。

さらに、「アブハニ自身はお金を取ることにどう考えていたか？」との質問に対して、「彼は、敵植民地主義者から税金として取立てるのは、正当な行為と考えていた。PFLP政治局も基本的に同じ考えだが、イスラム教徒が多数派を占める民衆の素朴な意識を尊重し、大義が理解されにくい作戦は控えようということにしていた」点などが語られました。

「アウトサイドワーク」と日本人

虎頭弁護士は、それらを質問した後、73、4年頃のアウトサイドワークの指揮下にいた日本人は誰かとたずねました。公然化されている名前のみをあげると言って、丸岡さん以下数人の名をあげました。

弁護士「その人たちは、いつごろまで『アウトサイドワーク』の指揮下にいたのか？」

丸岡「74年8～9月頃ということになる、人によります」

弁護士「74年11月ないし12月の総括会議の頃以降は、完全に『アウトサイドワーク』の指揮下から離れたということですか？」

丸岡「私の方からドクターに通告して、組織の共同原則をつくるまでは、実践共同を凍結したいと申し入れた。政治的関係性をまず強化しようと、軍事共同についてはすべて凍結した」

さらに、「アウトサイドワーク」の位置や軍事部門本隊とその責任者、アブ・アリ・ムスタファの位置、73年のアブハニの処分、76年の除名（「権利停止のくりかえして除名になったと思う」と証人）、78年、東ベルリンでのアブハニの病死とその後バクダッドでPFLPの党としての葬式が行われ、数万人の葬列だったことなどが語られました。

PFLPの機関誌、さらには英文機関誌については、ガッサン・カナファーニに重信が提案して作られるようになったいきさつ、そしてPFLPとANM(アラブ民族主義者運動)の関係なども語られました。

PFLPとアラブ各国の関係

弁護士「73ないし74年頃PFLPまたはアブハニと南イエメンとの関係について聞きたい。当時の南イエメン政府はどのようなものだったのか？」

丸岡「ひと言で言って、統一戦線政府です。アラブ民族主義者運動(ANM)、パース党、共産党の」

弁護士「共産党はソ連共産党系？」

丸岡「ソ連・中国・ユーロ派、どれかといえばソ連系。しかし東欧のような衛星党という感じではない」

弁護士「パース党系とは？」

丸岡「有名なのはシリアとイラクのパース党政権。戦後に生まれてきた政党で、アラブの統一、社会主義、自由を標榜する社会主義政党」

弁護士「ANM、これはどういうことをスローガンに掲げていた？」

丸岡「反植民地主義と民族主義を掲げていた。PFLPもANMから生まれた。ペイルートで初期のANMの運動をやっていた人が、ノバシュ議長(PFLPの創始者)やアブハニであり、それと友好関係にあったのがナセル主義者のアラブソーシャルユニオン」と説明しつつ、南イエメン政府の一部の要人がANMの同志であり、PFLPとはつながりがあったことを語りました。

またPFLPとイラクとの関係については、72年のリッダ闘争が契機となって友好関係が深まっていったことが語られています。当時のイラクパース党はハッサン・アルバクル大統領の下で、パース党・共産党・クルディスタン民主党的連立政権だった。リッダ闘争後に重信がイスラエルのテロの標的になるので、PFLPが保護を求めて、イラク政府が歓迎する形でバクダッドとPFLPの関係が深まっていった。さらに、PFLPの事務所や軍事訓練を認める関係が作られていったと証言されました。

そして丸岡さんは当時(73年1～6月)コーチとして軍事訓練を担当していた時に、アラブ諸国や東欧などから留学の誘いがあったが、その話に乗らなかったことなど、丸岡さんやPFLPの活動の条件と範囲などが示されました。

リッダ闘争への関わり

弁護士「奥平剛士さんから作戦に誘われたことは？」

丸岡「はい、あります」

弁護士「どう言われましたか？」

丸岡「私が非常に射撃の成績がよかったので、狙撃手として丸岡がいると戦力になると言われました」

弁護士「いつごろですか？」

丸岡「72年5月。5月上旬だったと思う」

弁護士「参加してもらいたい作戦の内容についてはどの程度説明があったのですか？」

丸岡「私は日本に帰る前提で来ているので、生還できないということであれば、参加できない。結果として生還できないことはよいが、最初から生還できないとわかっている作戦には、日本を出る時の約束ではないので参加できない。1年後であれば身辺整理して参加する、と言った」

弁護士「生還できない作戦と言われた？」

丸岡「できないと。実は自決する作戦であるとの時間聞いた。むしろ自決が方針の一つといわれた。近いうちに訓練が始まって、その後に行なう。遠い時期ではない。ただし参加しないなら、その内容については知らない方がいい、と言われた。それで、どこで、どういう作戦をやるかは聞いていない。」と答えました。

弁護士「奥平剛士さんらの心情はどういう風に考えてますか？」

丸岡「私は奥平同志とも安田同志とも気が合っていたので、生きてほしいという立場にあった。しかし奥平同志らがそこまですることが必要だという考えに至ったのは、第一に、初めてパレスチナの大義にアジアの戦士が命をかける。イスラエル兵であっても人をあやめる以上、自分たちもそれ相応の犠牲を払わなくてはならないと。二番目に、イスラエルの拷問は非常に厳しくて、耐えられず、実際にパレスチナ戦士が捕まると自白していた。だから、生きてばくられることを前提に出来ない。三番目には、連合赤軍の同志粛清に彼らは非常に衝撃を受けていた。革命家の死は、仲間殺される死であってはならない。非戦闘員がこの作戦で殺される可能性があり、その場合、同志殺しと同じレベルの者としか見られない。だから、自分たちが生き残る道は選べない、と話を受けました。」

初めて、丸岡さんは当時の状況をバーシム奥平たちの言葉として、生の想いを法廷で伝えました。封印してきた思いを淡々と、しかし一句ずつ、彼らをいたわるように語りました。バーシムたちを思い出し語る言葉に、速記しながら私までレポート用紙にボタボタと涙がこぼれてしまいます。

「革命家の死は仲間殺される死であってはならない」「隊伍を整えなさい。隊伍とは仲間のことであります……もはやどんな困苦と欠乏にも耐えうる仲間のみあった」突然にバーシムたちの姿、彼らの早足の歩き方が鮮やかに現われて困りました。

足立公判との証言の違いについて

弁護士「足立さんの公判では、あなたは決死作戦と知らなかったと証言したのはなぜですか？」

丸岡「弁護士さんからの不意打ちだったので、リッダ闘争の作戦には一切関与していないのに、決死作戦を知っていたといえまざると、72年にリッダ闘争の共同正犯で私に逮捕状も出ていて、つい自己防衛的に答えた。『答えられない』と言うべきであったと思う。またこの11月で、法的には時効を迎えたこともあって、はっきりさせたいと思う」と答えました。弁護士「実際、リッダ闘争は決死作戦として行なわれ



たということで、あなたに与えた影響は？」

丸岡「私は、日本でいっばしの活動家ぶっていて、ある程度口もしゃべれると、当時、自慢にならない自信を持っていた。しかし、実際に同志達が死んだという現実と直面した時に、自分の価値観が180度変わってしまった。それまで、理論とか重視すべきと思っていたが、まず口ではなくて実践だとガラッと変わった。だから、72年8月、重信から文書書いてと言われたが、わたしはやるだけですと断った。赤軍派は嫌いだ、路線までは否定していないので、そういう政治的なことはそちらでどうぞやってくださいと。私はとにかく奥平同志のあとにつづくということを個人的決意としていた」と、リッダ闘争を経た丸岡さんの当時の価値観の変化した状況などが語られました。

リッダ闘争後の反響

さらに当時の各国のリッダ闘争に関する反応が語られました。エジプトのサダト大統領は右派なのだが、「我々も日本人につづかなければならない」と演説し、日本政府がイスラエルに見舞金150万ドルを支払ったことをクウェートの新聞が非難して、イスラエルと取引している商品をボイコットする通称“アラブボイコット”に日本企業の製品も入れて、ボイコットすべきという記事を書くほどだったと、「正当な闘い」「被占領地を解放する神聖なる闘い」として、クウェート、エジプトのような右よりの国でも絶対評価し、リビア、シリア、アルジェリア、南イエメンなどの反米政権は強く支持する立場を表明した様子も語られました。

関連するエピソードとして、ドバイ事件時のリビア側の対応として、リッダ闘争を闘った日本人だけは出ていい、自由にといいことだった。日本人の方はあくまでもユニットの闘いであり、自分だけが解放される訳にはゆかないと主張して、それは流れたことが語られました。

また78年、自分たちで5・30リッダ闘争6周年絵はがきを作って、各組織に配ったが、それがシリアパース党機関紙にそのまま掲載されて、「我々は、日本赤軍に感謝しなくてはならない」という論調を書いた。日本大使館がシリア側に嚴重抗議したり、そういう形の強い支持があちこちであったことを語りました。

ドバイ事件に関連して

その後、虎頭弁護士がドバイ事件について若干の質問をしました。

弁護士「ドバイ事件は政治局の承認を得て行われた

ものですか？」

丸岡「当初、政治局の承認を得たPFLPとしての作戦ということだったが、いざふたが開くと政治局には一切通していなかったことが分かった」

弁護士「政治局は事前には知らなかった？」

丸岡「そのように聞いている。作戦の責任を否定するのと、ハイジャックの作戦自体を方針として放棄していたので、認められないと、非難を加えた」

弁護士「アブハニ自身は、結果をどう評価していたのか？」

丸岡「結果は、敗北と評価してたと思う」

弁護士「アラブにいた日本人の間での評価は？」

丸岡「まず政治局による作戦の否定で、約束が違わないかと、ドクターは信用できないという評価だった。作戦自体については、政治的には目標は達成したが…」と答えていると、

西谷検事が介入。立ち上がってさげざり、「ドバイ事件の証言は、直接体験事実なのか、伝聞なのか、証人の意見なのか、まずその前提を明らかにする尋問をすべきだ！」と言いました。

時計を見ると2時35分、1時間以上時間がたっています。虎頭弁護士はひきつづいて丸岡証人とつづけていきました。

弁護士「ドバイ事件が、PFLPから日本人が自立していこうという切っ掛けになったそうですが、その考えがどういう意味で生まれてきたのか？」

丸岡「端的に言えば、ドクターのやり方は、共産主義者のやり方ではないという1点です」

弁護士「もうちょっとわかりやすく言う？」

丸岡「戦士たちを将棋のこまコマのように扱うこと。主体性を与えず、一人一任務の必要悪で、組織的に意志一致しないこと。経験に基づき旧来のやり方を変えないこと。徒弟制度。それらに承服できない」と答えていると、

今度は裁判長が介入しました。「さきほど検事も言っていたが、それは誰が言ったのか？」

丸岡「我々、まだ日本赤軍と言ってなかったが、私も含む日本人の中のアブハニに対する評価」と、これまでより強い口調でアブハニ批判を表しました。

その後、欧州グループがどういう組織実態だったのかを確認して、いったん休憩に入りました。

休憩のための儀式は、出ていく傍聴席と丸岡証人や被告人の私のささやかな交流の機会です。思いきり表情をこめてゆっくり進みつつ、丸岡さんに視線が注がれます。愛嬌ある笑みが、高揚で少し上気したまま、丸岡さんはみんなにあいさつをしています。

ハーグ事件の頃の証人の動き

3時8分から再開しました。大谷弁護士にかわりました。

大谷弁護士「要するに72年4月以降、アブハニの『アウトサイドワーク』に関与していたということね？」

丸岡証人「はい、その指揮下にあったという事です」

大谷弁護士は、ドバイ、ダッカ事件に関して、丸岡証人が関与を否認している立場を確認したうえで、長くアブハニ配下にいたものとして、具体的に聞きたいと証人に伝えました。更に、「ハーグ事件には関与していないですね？」と聞き、丸岡証人の「していないです」を確認したうえで、具体的な質問を行いました。

弁護士「74年7月下旬あるいは8月初旬、ペイルート空港に着いた時逮捕された人（アブハニが共同していたアシェン・グループの人）がいることを、あなたは知っていましたか？」

丸岡証人が「知っている」と答えると、「どこで知ったのか？」「どういうルートで知ったのか？」「どういう理由で逮捕されたのか？」「その人はどういう人か？」など、当時のことが質問されました。「その逮捕事実を知ったのが74年7月か8月か、特定できるかどうか？」との質問がなされました。

どうしてこうした質問に焦点が当てられたのかと思いましたが、ちょうど丸岡証人が、そのペイルート空港の逮捕をニュースで聞いた後に、海外からダマスカスに着いて、ペイルートに来たため、ペイルートに来た時の8月7～11日の間という日付を特定するためのようでした。

予定外にペイルートへ寄ったこと

すでにバクダッドに行くためのチケットを購入していたのに、ドクターがペイルートにいるならそこでドクターと話せば、日本人の同志にも会いたいし、そこで用事をすませられると思って、ダマスカスから一旦ペイルートに行った。そこで、ドクターの部下からアブハニは居ない、バクダッドに來いと言われていたら予定通りに行った方がいいと言われた。そしてドクター・グループの人に日本人のYのアラブ名を言ったら、Yは任務に行ったが何かあったらいいと言われたこと。日本人について聞くと、ある他の日本人の名前を言われたので、その人のところに丸岡が立ち寄ったこと、バクダッドに行くことを伝言してくれと言ってペイルートを離れたことが語られました。

大谷弁護士は、初めて聞く話にとまどっているようです。弁護士と丸岡さんの尋問などの打ち合わせは、証



人が服役中なので、一般面会扱いの1回30分の中しかできないのです。そのため打ち合せや聞き取りも何をお互いに聞きたいのかが、把握不十分です。

丸岡さんから初めて出てくる話で、大谷弁護士のみこめず、「アラブの人にペイルートに会いに行ったの？」「アブハニに連絡できるのがいるのか？」「日本人に用件だけ残したって、誰？」と、証人の発言の意図を理解しようとしていました。

丸岡さんは「誰かは言いたくないし、軍の関係の人ではない」と答えました。そして、そのペイルートの短い滞在の際、ペイルートには「アブハニは居なかった」こと、「重信にも会っていない」と答えたので、「非軍事の日本人に用件を残したというのは、重信さんにはではないですね？」と弁護士が聞き、そうではないことを確認していました。

バクダッドでアブハニと話したこと

その後、丸岡さんはバクダッドに行き、ドクターに会って話をしたことが語られました。

弁護士「ドクターに会えてどんな話をしましたか？」

丸岡「呼び出しがアシェン・グループに関しての呼び出しだったので。それとジハード（Yさんのアラブ名）がトラブルがあったのでどういうことか聞き、これまでの報告などを話した」

弁護士「トラブルがあったらいいけどというのを、8月7日～11日頃に話したということ？」

丸岡「記憶では8月の12～14日の間だと思う」
弁護士「トラブルがあったらいいというのは？」

丸岡「ドクターから、実はバリーでYが逮捕された、と聞いた。Yさん以外のことで話したことは自分が日本人の同志たちから話を聞いてないので判らないのだが、今後の共闘について話しをきちんとしたいという話をした。アシェン・グループに関しては何の用事だ

と聞いたら、私が彼らを知っていたので、私にフランスに行ってほしいということだったようです。でも、ジロー（Tさんのこと）が行ったからもういいと言われた」

弁護士「あなたは日本人逮捕をドクターから初めて聞いた？」

丸岡「はい」

弁護士「その時ドクター自身がどういう展開になるという話が出ましたか？」

丸岡「はい、事情はよくわからないが、フランス当局に紳士的に解決するように申入れる、8月末までに解決するように。できなければ重大な結果を招くという交渉をする」と聞いた」

弁護士「それはドクターが責任持ってやるということ？」

丸岡「はい」

弁護士「あなたは、足立法廷で話しているのは、Yが逮捕されたことをアブハニから呼ばれて、『アブハニからYが逮捕されたので戻ってこい』と言われて戻ったと証言しているが？」

丸岡「その時は記憶違い。7月26日のYの逮捕、証言の中でアシェン・グループと訂正するわけにはいかず、そのままとばした」

弁護士「そこんところは証言どおりではないということね。そのあと話合いがつかなければ重大な結果を生むと言ったのね？」

丸岡「フランス側とはそのような交渉をするということですか？」

弁護士「足立法廷では、『その話合いがつかなければ闘争を組むという話をアブハニがしていた』とありますが、闘争を組むというのはハーグ闘争のような？」

丸岡「主旨はそうです」

弁護士「『そちらの方向に私の方はさかれる』（足立法廷での話）という話？」

丸岡「いつ、どのようにやるとは聞いていないが、声明文とか作成に忙殺されるということ」

弁護士「闘争そのものへの関与は？」

丸岡「それはまったくくないです」

その後、バクダッドに着いた直後の話をうかがいたい、大谷弁護士はつづけてくれました。バクダッドで会った日本人は、と聞かれ、「すでに出ている（わかっている）ということでは、戸平に会った」「吉村にも会った」と付け加えました。

パリ事件に関連して

また、「当時日本人がYさんのあとパリで逮捕されたことをどのように知ったのか？」と聞かれ、「逮捕された人たちが撤収して来て知った。Tさん、日高さんが（バクダッドに）撤収して来たので、どちらか二人のうち一人から聞いたのは確か」と答えました。

そして、当時Tさんと話して、パリを追放されて来た経過をあらまし聞いたとのこと。

弁護士が「翻訳作戦の内容は聞いたか？」という質問に、「具体的なことは聞いてない。拘束されたY逮捕、押収されたYが持っていたものから、日本大使館も出てきているだろうという分析などを話し合った。それらの話合いは8月25～29日の間だろう。庄司先生（注：リビアに拘留されていた日本赤軍メンバーの弁護のために、中東に出張されていた弁護士）にもその頃会った。そして8月29～31日の間にバイルートに行ったと思う」と語りました。

弁護士「庄司さんに会った？ いつごろか？」

丸岡「私の記憶ではドタバタする前だったと思う。（パリ追放組にバクダッドで会う前とのこと。）庄司先生は目的がリビアの裁判ということでみえたので、それに関連して死んだ女性（日航機ハイジャック時、機内で誤って落とした手榴弾を自分の体で覆って、乗客や機体に被害を出さないように殉死したパレスチナ人女性兵士）のことを知っていたら教えてほしいと、話した。」

その中でファタハ（注：アラファトの率いるPLO内最大のパレスチナ解放組織）で、PLOのアブイヤドさんという、アラファト議長に次ぐ人に会って、裁判を受ける釈放の段取りなどを聞いたこと、それらを成り立たせていたのは、重信のパイプ役があったからなどが語られました。

庄司先生は8月17～9月8日まで、リビアのトリポリにいた。そのあとカイロバイルートを通ってバクダッドに来たということだったと語りました。

「その後、欧州で起った具体的なことをバイルートに伝えてもらうため、Tさんにはバクダッドに残っ

てもらって、日高さんにはすぐバイルートに行ってもらった。ドクターから和光のY解放の作戦を聞いていたので、とにかくバイルートに行かないと動きがとれないと思っていた」と言いました。

弁護士「あなたは和光さんがY解放の作戦に出ているとドクターから聞いたのか？」

丸岡「はい、ドクターから聞きました。基本的には、カルロスをチーフに和光をキャップにして欧州に送るとの話です」と答えました。

その後、丸岡さんがバイルートに着いたのは30日から31日頃で、9月には入っていないと思うとのことでした。そして組織的活動をしている人、Aさんとかその他に会ったが、重信はその後2、3日か4、5日後くらいに会ったと思う。Aさんとは緊急性のあるYの話、欧州の弾圧の話をしたと語りました。「欧州から追放された人が、バイルートに来ていたと思うんですが、誰かと会いましたか？」と弁護士が質問し、「Gさんと初めて会った」ことが語られました。

Tさんがフランス当局に話してしまったために、相当の被害を受けるということで、Aさんらと会う必要があったことが語られました。

その後Gさん調書の中で出ていることで、「部隊が動いている」という話を、丸岡証人がGさんに話したとなっているが、その際重信がいたかどうか？と聞かれて、いたかどうかわからない。いわゆる組織部門の同志たちにも、ドクターの方で体制を取るというのも、そういう話をしたか、いたか、はっきりした記憶がないとのこと。

弁護士「政治交渉では何とかならないか？ということではないのか？」

丸岡「私自身はYがニセ札を所持していたとドクターから聞いていたので、分析していたのと、和光が動いていたから、軍事作戦なので即政治交渉が決裂する前提で動いていた」とのことでした。

バイルートの「泪橋」について

弁護士はG調書の信憑性に疑義する意味で、さらに当時の「泪橋」と呼ばれていた場所について書かれていることを地図で示しつつ、質問しました。

丸岡さんは、G調書にある「泪橋」は9月当時は無く、違う家だったこと、11月以降に「泪橋」が設定されたということで、G調書に添付された地図を弁護士が示し、それを見ながら丸岡さんが説明しました。

丸岡さんの記憶力と細かいことへのこだわりの性格が全面開花してるなあと、傍聴席の友人と顔を見合わせて笑いました。本当に記憶には個人差が大きいとつくづく感じています。

「原本があれば……西側の北にある通りの名前からいけばもう少し北……。11月につくった『泪橋』の位置として、この地図の印の場所はリアドソルハ。これは銀行街で違います。東側はキリスト教、西はモスLEM地区が舌のように飛びだしている地区……」

うーん、細かいなあ……もういいんじゃない、と思っているところに、

裁判長も介入。裁判長は逆に細かいのが好きなのか、自分の持っている同じ書類を差し出して、「銀行があるという記載があるのか？この地図ならこの辺というのを示すことができるか？」と、言ったので、弁護士が裁判長の書類ファイルを受取り、証言台に持っていくと、丸岡証人と裁判長はしつこくやり取りしています。

丸岡「アキル、東西に走る道、ユダヤ教徒の地区で、道が出ていれば……。ファクアルティン……くわしいバイルートの地図を見せていただければ……」

裁判長「FAKHREL DINの通り沿い？」
二人のやり取りに検事もボーと見ているだけです。「いいです、調書に示されたここではないという主旨はわかりました」と裁判長が言って、その話題はやっ

ハーグ事件に関わるいくつかのこと

その後、大谷弁護士はGさんの調書に書かれている手紙のやり取りに郵便局気付の方法を使っていたことなどを聞きました。

大谷弁護士は、G調書で、「Y奪還のために、すでにコマンドが出発した」と告げられたとあるが、いつごろのことか？という質問に対し、

丸岡証人はハーグの始まる10日くらい前ではないか、と語っています。75年9月の員面調書によると、重信が丸岡の前で発言していることになっているG調書の内容については、あり得ないはずと答えました。

ハーグ事件はどこで知ったか？について、ラジオニュースで知り、もう一つのアパートの他の組織部門の人々と一緒にいた重信たちに伝えたが、それは「泪橋」ではないと否定しました。

そして、弁護士の「アブハニの指揮下にはアラブ人、外人もいて、日本人だけの実行行為に違和感は無かった？」という質問に対し、「分けたのだろう。展開の仕方、カルロス中心と聞いていたので、例によって交渉と実行を分けたのだろうと思いました」と答えました。

弁護士の「具体的な人選はアブハニが全部選ぶのか？」という質問したことにに対し、「ドクターから与



えられる数少ない権限として、作戦人材はキャップが決める」と答えました。

裁判の予定調整

すでに弁護士は時計を見て、「まだ、あと1、2時間、私の分がかかります。聞いてもらってるように、よく打ち合せてきていないので、時間が予定よりかかっています。まだその後、総括会議のこともありますし、次回は全部弁護側の方で時間がかかると思います」と、次回は検察側の反対尋問の時間になっているのを、弁護側で使わざるをえない点を提起しました。

西谷検事は「弁護側主尋問3回で、検察反対尋問1回というのは困ります」と、すぐ反論しました。裁判長が「3月はライラ・ハリド証言で、そのあとにするか……」というのに対して、「のばすといっても証人の移管の条件もあるし、3月以前に入れるべきです」とまた検事が発言し、大谷弁護士が「3月はライラが入っていて、そこに証人日程入れるのはちょっと準備が無理です」と反論していました。

結局裁判長が「それでは、あとで調整しましょう。とにかく、次回は弁護側の主尋問ということで、はい、証人は結構です。これで閉廷します」と告げました。

閉廷の賑わい

人権上の配慮として、手錠姿を傍聴席に示さないように、被告人の入出廷が考慮されるようになっていきます。丸岡証人にも傍聴席の友を見送ってから施錠するという人権的配慮を次回はしてほしいものです。

丸岡さんに会いに来られた人々の顔ぶれが見えます。丸岡さんはみんなとの目元に頭の中が破裂するほどでしょう。気持や感情をためこんで、満面の笑顔で、みんなにあいさつをしています。前回仕事で来られなかった娘も、10代前半の時に別れたままの丸岡さんになつかしそうに手を振っています。丸さんも子供だった娘を見つけてうれしそう。(前回にもう一人の妹分は丸さんとの対面をはたしました。)

私も丸さんと視線を合わせてあいさつしようとするのですが、丸さんの忙しさをなかなか視線はこっちを向きません。やっと弁護士たち、被告席の方を向いたのであいさつをすると、ペコリと頭を下げ、瘦せただけど昔と変らない様子です。病人のようではありません。軽やかな楽しそうな足取りで出ていきました。車椅子ではないのか？ 安心しました。

今日はこれから「支える会」の忘年会があるとのことでした。多忙の中、ありがとうございます。

そして他のみなさんも良いお年を！ ありがとう！

クリスマスモードが溢れる帰路に

6時近く、早い闇になった夜の町を帰ります。日比谷公園の暗がりから有楽町を経て西銀座に入ると、あちこちにクリスマスのイルミネーションが燦然と飾りつけられています。阪急、ピカデリー、西銀座の人並の中、木々までクリスマスイルミネーション。溜息が出るほどの人工的の光。不況と言えは言うほど飾りたくなるのかもしれない。実業があるのだろうか、なんだか虚業の飾りのように楽しさとさびしさの銀座通ります。

アルマーニとかの、外国でいつでも見ている光景に出会う。第三世界の首都では一番の目抜き通りが、ルイヴィトンやアルマーニに占領されているのだけれど、日本は違うと思っていたら、なんだか同じ風景になってしまう感じでちょっと残念。

眼を一杯にして、クリスマスに溢れる街の飾りやクリスマスセールの様子まで、一瞬を逃すまいとキョロキョロ。今日は銀座を抜けそのまま東京駅・八重洲口へ。それから晴海通りか、右折して、宝町あたりから高速に入りました。夜の東京駅、人の波がちょうど仕事の引け時で延々とつづいています。

不況の中大変だろうなあ……と、さまざまな友の顔が浮びます。こういう時はいつも迷惑をかけてしまった友人や仲間やさまざまな人々のことを思い返します。職を失った友にも何の謝罪すら満足にできずにいることを思い、申し訳ない思いがこみあげます。どうか良いお年を迎えてください。

今年のさまざまな協力ありがとうございます。

高速に入ると、ぼんやりとした満月が雲の間に見えます。明日は雨なのでしょう。デジタルの時計は6:25、温度は8℃。

寒さの増した房に戻ると、7時のニュースがもう終りかけていました。今日は師走の金曜日の高速が混んでいたためです。今日の配布物などを受取りましたが、花がありませんでした。

「花を忘れていないですか？ きっと花があると思うのでちょっと点検してください」と係官に言いました。5分ほどして「すみません、花、預っていました」と、持ってきてくれました。催促してよかったです。チューリップの真っ赤な花と水仙の花。まるで春のような花が寒い部屋を華やかに飾りました。ありがとう。

無期刑の友の入廷待つ静寂
ひとみこらして気持抑えん
護送車で銀座通りのクリスマス
光の渦の楽しくさびしい

東アジアの地殻変動と溶解する日本資本主義

カラス天狗

のが日本産業の空洞化と、それに関連した構造的なデフレである。

産業空洞化は日本に限った現象ではない。例えば、世界市場と密接に連結しながら成長してきた台湾でも中国本土への資金・産業・人材の流出で空洞化が急速に進行中である。このために、税収減と失業対策費の増加に伴う財政赤字は深刻化の一途をたどっている。そして、失業対策の財源確保のため特別公債の発行を決定したとたんに、米格付け会社スタンダード・プアーズは民間企業の資金調達にも影響する台湾当局の長期債の格付けをダブル A からダブル A マイナスに引き下げてしまった。

モノの流れの異変

中国と ASEAN 国境を行き交う部品の動きに異変が生じている。各国は同じような部品を輸出入しているのである。その背後に東アジア全域で部品を調達する日本企業をはじめとする多国籍企業の存在があり、こうした動きが中国主導による東アジアでの FTA 交渉を加速している。もちろん、中国は中国なりの戦略で事を進めている。すなわち、WTO 加盟で生じた経済成長下のデフレの進行という中国経済の矛盾の拡大の解消、ASEAN 内の中国脅威論の緩和、米国単極構造への対抗、アジア地域での発言力の強化である。

モノの動きでは、IT 企業や自動車メーカーなど製造業のアジアでの生産拠点の再編開始が目立つ。賃金の割安な中国での生産を考慮しながら、高度な生産技術や効率的な物流体制などを優先、アジア各地での生産拠点のスクラップアンドビルトの動きが顕在化している。以下はその一例。

- 集中：トヨタ…タイで04年からピックアップトラックの生産を3倍の20万台体制に。
- NEC…04年までに中国に全販売量の85%のパソコン生産を集約。
- 東芝…03年からインドネシアにテレビ生産を集約。
- GM…03年からタイで東南アジア向け小型セダンを新規生産。
- 分散：日立…02年から中国とインドネシアでプラズマ・ディスプレイ・パネル(PDP)テレビ組み立て。

「汎アジア経済圏」構想

03年01月08日、インドを訪問中の川口外相は、ニューデリーのインド商工会議所連盟で、日中韓3カ国にインド、ASEANを加えた枠組みによる「汎アジア経済圏」構想を提唱し、加えてインドとの新たな安保協議開始も訴えた。97年のアジア通貨危機を契機にアジア通貨制度への要求が強まり、中国とASEANとの間の自由貿易協定(FTA)締結への動きが加速する中で、日本政府関係者の一部に東アジア経済圏構築を探る動きがあるようだ。この小論では東アジア経済圏、東アジア共同体への指向の根拠といったものを探ってみよう。

衰弱の一途をたどる日本経済

日本経済の窮状が続いている。その様子はこの1か月ほどの新聞の見出しからも読み取れる。若干のコメント付きでいくつかを紹介しよう。

高校生12万8000人就職決まらず。10月末時点での就職内定率は過去最悪だった昨年をさらに3.6ポイント下回る47.1% (文科省) 02.12.18 産経 / 衰弱 大卒者の5人に1人が無業。若者は締め出される。「企業倒産や不祥事の報道に日々接しているうちに、若者は職に夢を持ってなくなってしまった」03.01.04 日経 / 繰り返す危機 不安を映す「円離れ」、欧州市場で「ジャパン・プレミアム」再来。'02年の倒産は2万件に達する見通しで84年に次ぎ戦後2番目の高水準。10月の失業率は過去最悪と同じ5.5%。経産省は07年度の失業率を7%と予測。「痛みを許容できる範囲はせいぜい失業率6~6.5%。それ以上になると、街角にホームレスが目立つようになる。日本は情緒的な国民性だから社会不安になる恐れがある」(消費税を16%にせよという一筆者注) 奥田日本経団連会長。02.12.27 朝日 / 金融庁 02.12.25 発表の経営健全化計画履行状況；三菱東京を除く大手7銀行グループの中小企業向け融資総額が02年09月末時点で半年前に比べて9兆483億円も減少。自己資本比率を高めるため、各行が一層の「貸し渋り」や「貸し剥がし」を行っている実態が鮮明に。中小企業は「資金どこから」と悲鳴。02.12.26 産経 / 見たくもない現実であるが、これは現在の日本の姿の一端であり、このような状況を生み出しているも

インテル…中国、マレーシアに半導体後
工程拠点。

移転：松下…01年秋に普及型エアコン製造をマ
レーシアから中国に移転。

ソニー…02年秋に輸出用ビデオカメラ製
造を中国から日本に移転。

世界経済の低迷と競争激化が生産拠点の再編を促
し、低関税での部品調達と製品輸出のために、FTA
締結を急ぐ構造が分かる。

このような状況下、国内で中小企業への貸し渋り、
貸し剥がしを拡大する日本の大手銀行が中堅・中小
企業向け融資枠の設定や専任役員の設置など中国ビ
ジネスを強化し始めた。つまり、融資してもらいた
ければ、中国に出て行かねばならないとも言える。
日本の産業空洞化、日本資本主義のアジアへの融解
をほかならぬ日本の金融資本が加速している。

製造業のあり方の変化は流通業界の対応に変化を
もたらし、米・ウォルマート、仏・カルフル、独・
メトロ、日・イトーヨーカ堂…などの世界の流通
大手が中国に殺到している。急成長する消費市場の
開拓と同時に、生産コストの低い中国での調達拠点
を設ける動きが著しい。生産と消費を「支配」する
流通により、安価な商品がこれまで以上に国際的に
大量販売されることで、中国発のデフレ…経済学
の教科書にない…は世界中に拡大していく。その
一例を記しておこう。大手スーパーの西友は昨年 9
月、1本 390 円の折り畳み式ワンタッチ傘を売り出
した。競合店での普通の折り畳み傘の価格は 500～
1000 円。超安値は世界展開する米小売り最大手・
ウォルマートの傘下に入った「おかげ」である。同
社は中国での独自ルートを使って、日本国内の他ス
ーパーより 2 ケタ多い量を仕入れ、「限界とと思って
いた価格を一気に突き抜けた」（西友幹部）状況を
簡単に作ったのである。中国、東アジアを生産の基
盤としたグローバル化は「大量販売」という言葉の
意味さえ変えてしまっている。つまり従来の「大量
販売」はインフレと関連していたのに、ここで紹
介した「大量販売」はデフレと関連している。これ
は少なくとも第 2 次大戦後の経済ではありえな
かったことである。

資本輸出に転じる中国

国連貿易開発会議 (UNCTAD) 報告書によると、
中国は投資を吸い込む (02 年の直接投資受け入れ
総額は米国を抜いて初の世界一となる見通し) と同
時に、対外投資の動きも活発化させており、5 年後

には 01 年の 2 倍強の年間 40 億ドル (4800 億円)
になると予測している。その中で目立つのが石油な
どエネルギー権益確保を狙う中東、東南アジアでの
直接投資。東南アジア、南アジア、中東を結ぶ重要
な航空路線を持つエミレーツでは昨年中国語、
韓国語を話せる客室乗務員を搭乗させていて、機内
放送を通じてそのことをアナウンスしており、中国
と中東の接近ぶりをうかがわせるものがある。ちな
みに、日本語が使用されることはない。

米国は中国による中東でのエネルギー権益確保が、
自らが従来行ってきたのと同様に、武器援助と連動
しないかと懸念しているというが、多分連動するで
あろう。

中国政府はその他の分野でも自国企業の対外進出
を支援するために、対外直接投資に関する規制を緩和
する方針である。中国政府高官は「業績不振で安く
売り出される企業も多い。海外に進出する好機だ」と
いう。高度な技術を持っていながら貸し渋りによ
って十分な融資を受けられない日本の中小企業は
提携や買収の絶好のターゲットでしかも現在進行
中なのだ。

ユーロでの外貨準備を増やすアジア

きっかけは中国がドルや円に対しユーロの比率を
引き上げる方針を示したことである。韓国、シンガ
ポール、台湾もユーロへのシフトの動きを強めてい
る。外貨準備が日本について世界第 2 位の中国はユ
ーロの比率を 20～30% に高める方針という。韓国
では 01 年末から 02 年 08 月末までの間にユーロの
比率が円を上回り、ドルに次いで第 2 位となった。

アジア通貨危機時に取り沙汰されたアジア通貨基
金構想を直接的につぶしたのはこの地に経済覇権を
求める米国だが、この構想が潰えたもう一つの要因
は円の台頭を警戒した中国の反対があったからだ
ともいわれている。逆の見方をすれば、アジアでの
外貨準備に占めるユーロの増加とドル、円の後退が
アジア通貨制度を現実化する方向に作用するかもしれ
ない。

「東アジア回廊」構想

大量のヒト、モノ、カネ、情報、技術が国境を越
え、すごいスピードで行き交う状況は資本にとって
は、ある種自然な流れであり、後戻りする気配はみ
られない。むしろこの流れに如何に乗るか、その戦
略を如何に構築するかが問われるだろう。

総合開発研究機構 (NIRA) が 1999 年から 2000

年末にかけて行った研究「東アジアにおける通貨統
合：共通通貨 EAsia の中の Yen」をまとめた「NIRA
チャレンジ・ブックス 東アジア回廊の形成 経済
共生の追求」が 01 年 09 月 25 日、日本経済評論社
から発行されている。第 1 次オイルショック時の
1974 年に設立された NIRA は、オイルショック後
の日本経済の針路を示す膨大なレポートを作成、そ
の後の日本経済はレポートの指し示す方向に沿って
運営されたと言っても過言ではない。その NIRA
がアジア通貨危機という金融グローバル化による壊
滅的打撃…これによって、ASEAN の中で
米国が最も重視したインドネシアのスハルト独裁体
制が打倒された。米・タイム誌は事態を「革命的状
況」と呼んだ…を受けて、EU (欧州連合) の動向
を参考にしながら着手した研究から生み出された成
果が「東アジア回廊」構想である。

報告書は「はじめに」で「(グローバル化の中で)
日本がなすべきことは、東アジアにおける共通通貨
誕生の可能性を視野に入れつつ、そのなかでの日本
のあり方をさぐり、ひいては、日本の将来について
長期的・広域的に方向付けを行うことである。この
アジェンダは避けて通れないだけでなく、この方向
付けが 21 世紀の日本の帰趨を決定すると言っても
過言ではあるまい」と研究の背景を説明している。
つまり、東アジア共同体的なものの形成のみが日本
資本主義の延命を可能とするというのである。

その上で「人々にとって、通貨は、単に取り引き
手段に止まらず、その帰属する共同社会の存立その
ものを象徴する。…このため、…共通通貨の誕生
の…前提条件として…東アジアへの帰属意識が共
有される可能性…についての手がかりを得るため
に…次ぎの 3 点についての認識を深め」ることを
試みている；

1. 文化・社会の多様性
2. 国の大小を問わない国家間平等の尊重
3. 経済の相互依存の深化

以下の 8 テーマはそのための個別研究である、す
なわち、

- ・ 交通体系等からみた東アジアの相互依存深化
- ・ 東アジアにおける通貨政策の連携とその深化
- ・ 北東アジアエネルギー・環境共同体構想
- ・ 食糧・農業分野における東アジア諸国の連携
- ・ 保健・医療分野における東南アジア諸国間のパ
ートナーシップの構築
- ・ 東アジアにおける研究開発ネットワークの構築
- ・ 欧州市民から見た欧州通貨統合

・ 東アジアにおける連携と日本

研究の結果たどり着いた問題意識は「東アジアに
は統合の求心力となりうるような共通の文化・社会
といえる基盤は見当たらない。また、共通の政治理
念の形成によって帰属意識が共有されていくとは現
段階では考え難い」とし、「共有されていく可能性
は、今後の局地経済圏の発展、展開のなかにあるの
ではなからうか」と締めくくっている。以上は 2000
年 12 月時点での結論であり、研究では触れられて
いないが、いうまでもなく日本のグロテスクな政
治・経済体制を前提にしたものである。

00 年 11 月 24、25 日、シンガポールで行われた
ASEAN プラス日中韓による会議は東アジア自由貿
易圏づくりに向けた作業部会設置を合意した。この
会議中、通貨協力体制をつくることでは意見が一致
したが、日本の通貨マフィア達の悲願である「円通
貨圏構想」は中国の拒否＝「日本は歴史認識に問題
あり」でかすんでしまった。「円の国際化など言え
る雰囲気ではなかった」らしい。

03 年 01 月 14 日、各種報道は小泉首相の靖国神
社参拝を伝えていた。中国と韓国は早速強い遺憾の
意を表明した。猿にも出来る反省さえ出来ない日本
の、裏社会とも通底する政官財学の閥閥ネットワ
ークによる支配構造の解体なくして「東アジア共同
体」が展望できるか。このことは筆者が東アジア共
同体議論に接する度に真先に脳裏に浮かぶことであ
る。

とはいえ、民衆の共生というものを考えるとき、
歴史が造り上げてしまった現時点の状況から出発す
る以外にはないだろう。

東アジアの行方とパワーポリティックス

現在の日本国内経済の崩壊状況とアジアへの融解、
台湾経済の空洞化、韓国における経済特区の建設、
そして中国の西部大開発と連動して進められよう
としているメコン川流域開発、アジアハイウェー構
想などが東アジア共同体可能性の芽となるか。しか
もそれが真の共生の礎となるのか。中国の各方面
への拡大に ASEAN 諸国は「飲み込まれてしまうの
ではないか」と警戒感を強めている。

さらに、安全保障の問題も含めた「泥棒貴族」の
支配する米国との「つきあい方」も課題である。官
僚の一部と手を組み、世界各国との連携で日本自
国のエネルギー戦略を持つとした田中角栄は米国の
仕掛けたスキャンダルによって葬り去られた。保釈
で拘留所から出所した角栄は開口一番「ユダヤにや

られた」と言ったそうである。表現には問題があるが、欧米・多国籍企業、国際金融資本、国際エネルギー資本が作り上げた構造と彼等が利権確保のために仕掛ける諸々の謀略をどう克服するか。

先日、NHK テレビは米国企業による石油をはじめとする資源獲得戦をビジネスチャンスと考え、「企業活動」に邁進する民間軍事会社に関するレポートを報道していた。彼等はアンゴラ内戦という資

重信さんとの交流コーナー

一度は悲劇 二度目は茶番

辻 邦

米国によるイラク攻撃が現実のものになろうとしている。すでに米軍は戦闘態勢を整え、ジョージ・ブッシュ大統領による攻撃命令が出されるのを待つだけのようだ。米国は「独裁者サダム・フセイン打倒」を叫びながら、十年前と同じ愚行を繰り返そうとしているように見える。

マルクスは『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』の冒頭でこう述べている。

「ヘーゲルはどこかで、すべて世界史上の大事件と大人物はいわば二度現われる、と言っている。ただ彼は、一度は悲劇として、二度目は茶番として、とつけくわえるのを忘れた。ダントンのかわりにコシディエール、ロベスピエールかわりにルイ・ブラン、……伯父かわりに甥。そして、ブリュメール一八日の再版が演じられた事情も、これと同じ戯画である！」

これになぞらえるなら、米国が強行しようとしているイラク攻撃は、まさしく「二度目の茶番」以外の何ものでもない。今回の“主役”は「伯父かわりに甥」ならぬ「愚父かわりに愚息」であり（どちらも大人物とは言い難いが）、「敵役」は前回同

源争奪戦で核兵器に次ぐ大量破壊兵器＝デジカッターなど国際的にも問題となっている爆弾を平気で使用した。米国はこれをビジネスとみなし、規制を加えようとせず、積極的に「活用」する。これに対し、「国際社会」は沈黙を続けている。民衆の共生の前にはこのような国家のみならず民間の暴力装置が立ちあがる世界もまた存在しているのである。それをどう乗り越えるか。

様、サダム・フセイン。舞台も同じくイラクだ。

『ブリュメール18日』の中でマルクスは、1789年に始まったフランス大革命と、1848年から1851年までの二月革命期を対比し、またそれぞれの革命の“墓堀人”の役回りを演じた大ナポレオンと、その甥であるルイ・ボナパルトを比較して、後者は前者の滑稽極まりない戯画にすぎなかったことを明らかにしている。おそらく愚息ブッシュによるこのたびのイラク攻撃も、愚父ブッシュが行なった「悲劇」の、滑稽な戯画に終わるであろう。

ただし、一つだけ明らかなことがある。

それは、米国の攻撃で被害を被るのは何の罪のないイラク人民だということだ。しかしどうやら、愚息ブッシュとその取り巻き連には、自分たちの行動が引き起こすであろう結果に対する想像力が、決定的に欠如しているように見える。思うに、大国の指導者でありながら、彼らは「机の上」での戦（いさ）しか経験したことがないのだろう。だが、兵士や人民は机の上に配置されたチェスの駒ではない。パソコン・ゲームのキャラクターでもない。生身の人間なのだ。

『ブリュメール18日』は、次のような一節で述べられている。

「トリールの聖衣礼拝をまねて、彼はバリでナポレオンの皇帝マントの礼拝をおこなう。しかし、皇帝マントがついにルイ・ボナパルトの肩にかかる時、ナポレオンの銅像はヴァンドームの円柱のてっぺんからころげおちるであろう」

果たしてブッシュ親子の“銅像”は、円柱のてっぺんからころげおちる運命にあるのだろうか？

願わくは、米国のイラク攻撃が強行されないことを！！ 私たちの力でこの暴挙を食い止めることは難しいかも知れない。だが、できるだけのことをしたい——と思う。

歴史の迂回路の中で

前村 潤

ジャーナリズムの世界に関心をもったのはいつ頃であろうか。これは歴史をどう描くかということとの格闘から生まれてきたのではないと思う。同時代の出来事として経験した、その焦点となった場面のいくつかを振り返ってみたい。

アフガニスタンの現実を目の当たりにして

少し不謹慎な言い方になるかもしれないが、現実にとどこまで食いこめるのかをジャーナリストの力量とするのならば、アフガニスタンの歴史と政治的複雑さを紐解くほど面白いテーマはないと考えている。1987年に登場したナジブラ政権は、イスラム勢力との国民和解路線を推進し、1989年にはソ連軍の撤退を実現した。この政権には4人の副大統領がいた。そのひとりムータット氏は、1973年に王制を倒したダウド王子の政権で通信大臣を務めただけでなく、カルマル政権では駐日大使も務めた。日本への留学経験もあり、日本語が堪能であった。そのムータット氏から、「ロシア革命後にレーニンとアフガニスタンのアマヌラ国王が息投合した意味がわかりますか？」と尋ねられたときのことだ。この時からソ連のアフガニスタンへの支援や留学生の受け入れも始まった。この経験が社会主義的手法と取り入れたダウドのような王族政治家を生み、1978年の社会主義（4月）革命を担う人民民主党との連立政権が誕生する背景ともなった。

ムータット氏は、「北（ソ連）の国境を見てください」と続けた。「北には穀倉地帯が広がり、コンビナートが立ち並び、電気が絶えることのない街並みがあるのです。それが、ひとつ国境を越えただけで、冬ごとに餓死・凍死者をだし、非識字率は90%を越え、援助に頼らなければ生きていけない国があるのです。日本と違って昨日の出来事がテレビで報じられる社会ではなくて、歩いて、あるいはロバに乗って人づてに伝えていく社会なのです。中央にどんな政権ができていかなど無頓着に生きていく貧しい多くの国民で構成された国がアフガニスタンなのです。少数のインテリが社会主義に理想を託した理由がわかりますか？」と問いかげられたことを鮮明に覚えている。

「戦争を継続することで消費してしまうより社会主義の成果を残したい。制度が変わっても人的あるいは物質的資源は社会建設の糧になるはずですよ」

とのべていた。現に、ナジブラ政権崩壊後の北部同盟とタリバン時代に外出を禁じられた女性教員、女性医師、女性技術者に代表されるように、知識人の大多数が社会主義時代に高等教育を受けた人たちだ。スラブ系ソ連兵の間に蔓延する厭戦観と、ウズベキスタンやタジキスタンなどアフガニスタンと同じアジア系ソ連兵の士気の高さが際立っていたことも忘れられない。

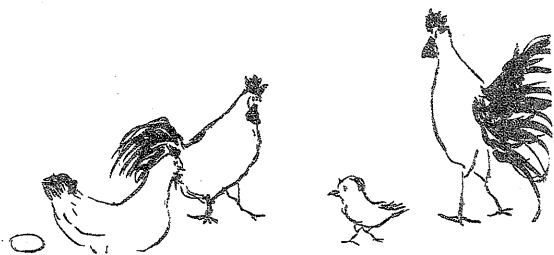
当時わたしは記者の肩書きではなかったが、こうした低開発国が置かれた現実を、白か黒かで論じたり、欧米メディアの受け売りに終始して何の疑問も差し挟むことのない日本のメディアに強い違和感を覚えた。昨年、ロシア国立公文書館で公開された当時のソ連共産党中央委員会の資料では、ソ連軍の派兵を要請するアフガニスタン政府と、それを拒否し、あるいは躊躇するソ連指導部の遣り取りが1年にわたって続いていたことが記されている。

北朝鮮の現実をどう捉えるのか

北朝鮮ほどネガティブな報道材料にこと欠かない社会もないだろう。繰り返し映像で流される軍事パレードやマスゲームに個人崇拜を強いる体制は、スターリン時代のカリカチュアにも喩えられる。しかし、それをここで問題にするつもりはない。悪しき事例をそのまま指摘するのは誰にでもできるからである。ここでは少し見方を変えてみたい。

「アリランの歌」を読まれた方は、温厚で時には情熱的に筆者のニム・ウェルスに語りかける主人公の朝鮮人革命家・金三の運命がどうなったのか、今どうしているのだろうか、誰もが思ったに違いない。岩波文庫版のあとがきで、第2次世界大戦中に所属する中国共産党内においてスパイ容疑で処刑されていたとの記述にさしかかったときほど、歴史の非情さを痛感したことはなかった。

朝鮮戦争の緒戦で北朝鮮軍の機械化部隊がプサン市に迫る場面がある。この進軍を支えた原因は、近代化された軍事力と、現在の韓国各市で組織された人民委員会の存在があった。人民委員会への参加者が国連軍の反撃の中で皆殺しにされたように、無名の革命家や運動参加者の犠牲は、歴史の1ページを繰るだけでも珍しくはない。担がれた国家指導者が本物か否か、誕生の地がどこであるかなどは副次的な問題であることがお分かりいただけるであろうか。少なくとも、大衆運動を基盤とした朝鮮革命の条件が、当初は北朝鮮にあったと見るべきであろう。

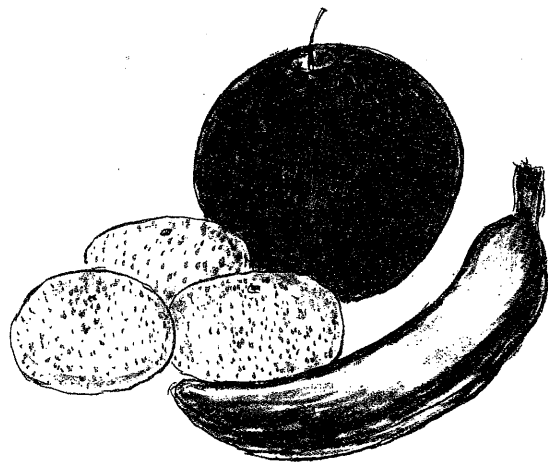


とは言え、朝鮮半島も中国同様に封建制の歴史が5000年に及んでいたという与件も見逃せない。朝鮮戦争の際の米軍による絨毯爆撃で荒廃した北朝鮮の復興事業、建国まもない中華人民共和国の朝鮮戦争への参戦と北朝鮮支援による疲弊、56年のスターリン批判を境にして中ソ対立が対決へとエスカレートしていく60年代。これらの時代が同時に、日本が再軍備され、韓国も含めて巨大な軍事力を展開する米軍との対峙を強いられた時代であったことも忘れてはなるまい。ベトナム戦争も始まった。外部からの軍事的重圧に加え、戦争関与を続ける日本への憎悪が北朝鮮社会に存在したことは想像に難くない。こうした外部環境の急展開に、遅々として国内で進まない人間の社会主義化の現状こそが、チュチェ思想と呼ばれる一国社会主義理論を生み出した必然性を見るべきではないだろうか。

歴史の迂回路の中で

ソ連邦をはじめとした社会主義世界体制が消滅してから12年が経過した。その理由を現存する北朝鮮も含めて、スターリン主義に帰する言説が目立つのだが、はたしてそうなのだろうか。スターリンの政治指導の誤りは明らかである。しかし、まだ社会主義諸国が雪崩れを打って崩壊した原因は究明されていない。

E・サイード氏は、最近の論説のなかで、パレスチナ・ナショナル・イニシアティブを発表した政治家たちと、アラファト議長をはじめとしたパレスチナ自治政府の政治家を対比させて、前者の際立った点を次のようにのべている。「民衆に奉仕するために選出され、彼らが必要とする解放、民主的な自由、公開討論や説明責任などを推進する統一政府と



いう考えである」と。さらに、「パレスチナ人たちを率いるのは、これからは高度な近代教育を受け、ものの見方の中心に公民権的な価値観が据えられているような人々であるべきだ」と未来を託している。わたしはここに、ひとつの答えがあると考えている。同時に、ジャーナリストもまた例外ではないと肝に銘じている。

第2次世界大戦が終わった廃墟の中で、ハイリッヒ・マンは「ヘンリー4世」を書き上げた。そして、その統治時代の後退を、時代を前進させるための大きな迂回路として歴史を描くことで、後世に希望を託した。今また試練をともしないながらも、新しい歴史のとば口で未来を展望できないだろうか。

今年の目標

重信メイ

2002年は私にとって、多くの方々からの援助と支援で、とても実りの多い年でした。母もまた、古い友達や彼女が個人的には知らない方々の継続的で親切な支援で、肉体的にも精神的にも、より健康でした。

昨年、「オリーブの樹」の読者への私のメッセージで、違った考えや背景を持つ人々との交流を可能にするために、私は、「支える会」の状態を改善し、「オリーブの樹」の読者の範囲を広げたいという希望を述べました。でも、このことはまだ完全には達成されていません。もちろん、支える会の私たちは、短期間にそのような進展を作ることが難しいことをよく分かっています。それで、今年も、私の目的のひとつとして、この目標をキープしたいと思います。私の最終的な目標は、注意をひいて、全ての意見、目的、考え、希望の間の限りない可能性と交流に参加する意志を起こさせることです。たぶん、私たちの周りにある社会的、個人的、地域的、そして国際的な問題を解決する方法の中で、この方法は、もっと拡大できるでしょう。

今年の私の別の目標は、将来、読み、書き、研究するのに問題がないように、日本語の知識を上達させることです。これによって、私は、日本社会で支配的で共通の情報や、メディアの中で重要な問題として取り組まれていることに、より親しめるでしょう。それに加えて、それは、そうした考えに返事を書いたりして、相互に影響し合うことを可能にします。これは、私が目的に到達し、国際ジャーナリ

ストになり、日本の情報システムの中にある情報のギャップを見つけるために、私にとって重要な一歩です。

もうひとつの私の今年の目標は、「支える会」のホームページを完成させることです。昨年中、待ちつづけ、楽しみにしていた全ての方々に、私はお詫びを言わなければなりません。私たちが何をし、考え、計画しているのか、公判がどのように進んでいるのか、どのようなイベントがあるのか、そして母が世界で起こっていることをどのように分析しているのかに関心のある人に、それらを最新化するために、ホームページ立ち上げることは、非常に重要なことだと、判りました。大きなページを約束することは出来ませんが、最小の新しいウェブ・ページを立ち上げつつあります。

このホーム・ページを通して、そして「オリーブの樹」を通して、私は読者と、中東、特にパレスチナで起こっていることを知りたいと思っている人に、私が入手できた情報を伝えるようにしたいと思えます。

最後に、討議し、社会問題の中で真の行為者となるよう努力し、この社会で、私の周りにいる全ての人々（若い人でも歳をとった人でも、活動的な人でもそうでない人でも）と、手を握り合いたいです。恐らく長い道のりの中で、このことは、私たちが暮らしている社会の改善を助けるでしょう。また、このことは、私が母と何かを成し遂げることをも助けるでしょう。

全ての読者、支援してくれる方々、支援をどうもありがとう。心から感謝しています。今年も私たちの小さい一歩一歩を見守ったり、いろいろの提案や意見や気持ちを、「オリーブの樹」を通して聞かせてください。どうぞよろしくお願いします。

今年の抱負

わたん

今年は、昨年末に「よし、これで行こう！」と決めた通り、「気取らず飾らず自己の本性丸出しで前に進むことであり、希望とはすなわち大衆化＝プロレタリア化していくことなのだ」との言葉がすべてを物語っている。

<重信房子さんを支える会>との関わりで言うと、私は残念ながら救援の実務には二次的な参加しか出



来ないが、房子さんや救援に集う人々との"交流の場"として今年もこの会に参加していきたい。

ところで、前述した「自己の本性丸出しで…」の部分を取って具体的に言わせてもらえば、私も今年で自衛隊を辞めて13年という歳月が過ぎてしまった。昨今の有事法制化問題、イージス艦のインド洋派遣などの事態に省みれば、ここでまた初心に立ち返り自分が自衛隊を辞めたことの意義を確かめたいという焦燥に駆られている。しかしそれは、私個人がどうのこうのと言う私的なものではなく、広く運動として、自衛隊の派遣に異議を唱え、またアメリカの中東情勢の介入に疑問を持つ人々との関わりの中で発揮していくことに意味を見出す必要がある。なぜならば、今こそ世の中の人々が自分の本音を言い難い時はなく、為政者やマスコミの反動的な言論統制に抵抗し得ない時はないと思うからだ。だからこそ私は、自分に出来るやり方で左翼党派が使い古してきた「反戦」ではなく、実際に銃を持つ者の視点から捉えた「嫌戦」を表現していくつもりだ。

私は、パレスチナの問題を学習し始めてまだ2〜3年と日は浅いが、それでも今まで自分が関わってきた大衆運動の教訓に照し合わせて考えてみると、「日本人として自分がそれをどう捉えていくか？」というところに行き着いてしまう。つまり、国外の問題に関する前に「まず、身近な自分の足元の問題から踏み固めていこう！」ということだ。パレスチナ人が自らの土地を離れず、そこで日常生活することを大切な闘いと考えるように、私もまた自分のフィールドに存在する問題と向き合っていきたい。「自分の足元の問題」から目を逸らさないことが、さらに外の領域と連帯していくために必要なことだと考えている。よりインパクトの強い手段で運動を創出していくには、まわりみちや道草を取ってやっていきたい。(2003年 1月20日)

死刑囚故永山則夫の基金でペルーから働く子供が来日

小林 忍

「働く事によって責任感を得られ、どれだけ人間の尊厳を高める事ができるか。サラリーだけではなく、労働には喜びがある事を伝えたい」。13歳の働く少年がこう挨拶した。残念ながら発言者は日本人ではない。

景気低迷が続くペルーから1人のコーディネーターに連れられて4人の少年少女が昨年12月5日、「永山こども基金」によって来日した。12歳から18歳までの彼らは「ペルー働く子ども・若者の全国運動」(MNNATSOP=ナソップ)を代表している。9日、都内で「Nから子どもたちへ」と題した交流集会在永山こども基金主催で開かれた。当日は今冬の積雪にもかかわらず、会場となった早稲田奉仕園小ホールは100席が満席となった。

この日、日本の労働運動の一日行動に参加した後に会場に姿をあらわした4人のペルー人の子供たちは「ILO批判」「グローバリズム批判」「労働価値論」などを「大人以上」に主張した。

「ペルーでは何千人もの労働者が解雇されている、それについて何も言わないILOが児童労働を批判している」とまず、児童労働の禁止を押しつけるILOの不徹底な姿勢を批判。さらにグローバリズム下のペルーの現状と対抗運動を紹介した。「(米国型)グローバリズムによってかえって、経済は悪化した。グローバリズムに対抗する民衆のグローバリズムが広がり出している。そのプロセスの中に永山則夫がいた事を確信します」。

「永山則夫の犯した“犯罪”をどう思うか」との会場からの質問に、少女が答える。「罪を犯して、それに気付いた。しかし、永山の罪は日本という社会の構造、(人格)成長のあり方にも責任がある」。

主催者側からは会場に問題提起があった。「彼らは児童労働の禁止に対して闘っている。本来ならその逆の立場だった。『子供が働く権利』はあるのか?この論点を正面から受け止めて議論したい」。

参加者の一人でペルーを10数回訪問した事があるフリージャーナリストのA氏(47)はこう説明する。「子供には『教育を受ける権利』もあるのですが、その経済的保障を抜きに『児童労働』を単品で取上げ、非難するのは先進国の奢りです。子供たちの親から仕事を奪っているのは先進国の強大な資本です。日本はフジモリ政権時代、校舍、制服など入れ物だけの援助をしてきました。その当時、ペルーの教職員組合は『母親のための自衛委員会』を作って子供たちに炊出しをしてるんです。空腹では勉強以前です。『物』を贈るだけでない、本当の民衆連帯に育ってほしいで

す」。

ペルー政府は革命組織「センデロ・ルミノソ」の主力解体をもって、内外に内戦終結をアピールし、外国資本の導入で経済発展を計っていた。ところが外資は内戦以上に荒々しく既成企業や小零細企業、商店に打撃を与え、大量の失業者を生み出していた。さらに「平和」によって軍事力は縮小され、やはり大量の兵士、警官が職を失った。その一部は武器を持ったまま退職し、武装強盗団に「転職」した。強盗団は首都リマ市中心部はもちろん、武装ガードマンを雇う事ができない中小農家をターゲットにしていた。

「本当の事を言いますと、内戦中よりも治安が悪化しています」(リマのある日系人会会長)。日本からの出稼ぎ送金を嗅ぎ付けた強盗団によって、日系人の商店、農家が犠牲になっていた。日系人大統領フジモリと青木大使が「安全」を喧伝していた時の事だ。もちろん、日系人に限らずペルー全体の景気低迷は現在まで続いている。これがペルーでのグローバリズムの具体的な姿の一面と言えよう。

グローバリズムの柱でもある欧米型価値観の普及に対して、「労働は喜びでもある!」というペルーの働く子供たちによる抵抗は注目に値する。翻って足元の日本はどうか。労働を忌避し、働く事と学ぶ事を「職業=職場」と「教育=学校」に二分して収納してしまっ

てはいまいか。私たちが無くしたものを、それをペルーの子供たちが教えてくれた。

ナソップ

96年3月に結成された。ペルー全国約30の組織から1万2千人の働く子供たちが参加。「子供主体」の運営が徹底され、子供たちは選挙で全国代表と活動をサポートする大人を選び各会議を開催している。

活動の柱になっている考え方は「プロタゴニスモ=主役主義」といい、働く子供は自ら考え、行動する能力を持ち、支援の対象ではなく、大人と共に社会に参画する主体である、という考え方で活動している。永山こども基金がこれを助成している。

永山こども基金

97年、死刑囚永山則夫は刑の執行直前に、「本の印税を日本と世界の貧しい子供たちへ、特にペルーの貧しい子供たちのために使って欲しい」と遺言を残した。1カ月後、遠藤誠弁護士を代表に「永山こども基金」が設立された。

投稿

シゲに捧げる「私小説」その18

山田美枝子

今年の夏は、なぜこんなに蒸し暑いのだろう。年々真夏に向けてのこの時期、身体が感じる辛さが増している。七月半ばだというのに、南方で次々に台風が発生している。今日の暑さは、昨日九州の種子島に上陸した台風の影響らしい。もし明日もこの暑さなら、父の三十三回忌法要など行くものか、と私は思った。

しかし翌朝になってみると、すっかり涼ぎやすい気温になっていた。やっぱりね、母さんの仕業だ、と思った。墓に呼び寄せたいのだ、と私は三年前に死んだ母の一子进行を思う。一子の死の床で私が、「お母さん、なにか言い遺すことは」

と尋ねると、「みんな仲良くね、兄弟が」といったのだ。兄二人に愛想を尽かしていた私を心配していたのかもしれない。子供三人のために愛のない結婚を続けていた親だった。

父の三十三回忌を寺の方から言ってきた、と長兄の春彦から一ヶ月前に電話があった。「一子さんの、三回忌も兼ねて読経してもらって、食事でもしよう」

と、母親を名前で呼ぶいつもの春彦らしい話だった。

私は、自宅のある茨城県の守谷市からバスに乗り利根川を渡った。北柏駅から千代田線に乗り、江戸川、中川、荒川を渡る。谷中にある観智院という母の眠る寺まで千代田線で四十分。私は北千住の駅を通過する少し前から必ず東京にむかって左側の車窓に目をやる。車窓の外に新しく建築中の小菅の東京拘置所が見える。地上九階建てで、丸いおおきなヘリポートまでが屋上についている。しかしその鉄筋コンクリートの巨大な新しい拘置所の方には私は用はない。それより私が今乗っている千代田線の線路に近い側にある古い監視塔と古びた二階建ての留置場の、並んだ窓に私は強い眼差しを向ける。独房にいる友人のシゲに友達ビームを送るのだ。勘の鋭いシゲはきつとなにかを感じて少しは元気になるはずだ。北千住駅から千代田線は地下に潜る。車内は急に日の光が断たれた地下鉄の車内になる。そこで初めて私は自分の義務を一つ果たしたようなほっとした気持ちにもどり、車内に身体のみきをもどす。

西日暮里駅で大勢の人々が、JR山手線に乗り換えるために降りていく。次の千駄木駅で私は下車し、

階段を昇って地上に出た。目の前の三崎坂を谷中墓地に向かって昇っていく。

三年前、車椅子に乗せた一子を彼岸につれてきたことが思い出される。一子は墓参りの習慣を私に教えたかったのだろう。一子の実家の墓は浅草にある。一子は彼岸などの墓参りを兼ねて兄や姉に会い、浅草の仲見世で三味線の絃など買い、食事してくるのをとても楽しんでた。一子の姉たちはみな長唄や清元を続けており、電話口でまでお互い「あそこはどうだったっけ」などと粋な色っぽい文句を口ずさんだりしていた。そして時には、電話の後私に、「姉さんたら、一子ちゃん一緒に死んでくれない、なんていうのよ」

などと、半分面白そうに話したりした。姉妹のいない私にはよく分からない関係だった。一子は末娘だった。

左手に菊見煎餅屋を見て、間もなく右手の千代紙屋、いせ辰に入る。江戸千代紙のポチ袋を買う、これも母の一子の習慣だった。配るお金などなくせに、常にポチ袋を用意していた。ちょっとしたお礼にもそのポチ袋に入れた金を渡していた。私はその外に懐紙や、粋な和紙の表紙のアドレス帳や俳句手帳なども買った。

店を出て、日除け用の黒いストローハットを目深にかぶりなおして歩きだすと、後の方で声が出た。「あれ、美登利ちゃんじゃないかしら」

兄嫁の詩真子の声だ。

振り返ると、頭髪の薄くなった丸顔で笑っている兄春彦と老眼鏡をかけ少し乱れた髪の子真子が、十メートルくらい後から三崎坂をあがってくる。春彦の容姿はますます死んだ父の捷重郎に似てきた。春彦は若い頃、映画俳優のオーディションに受かってニューフェースデビューしたくらいハンサムだったが、いまは、赤ら顔の肥った初老である。妻を常にいららさせているところまで父に似ている。詩真子は何回も一子に電話してきて、離婚したい、といていた。しかしもう孫もいるようになった。

「やっぱりね、美登利ちゃん、お姑さんと同じね、いせ辰に寄った」

寺の門の前に、すでに二番目の兄の京助と嫁の亜佐子が立っていた。私は亜佐子の方を見ないで挨拶した。私は兄嫁の二人のうち亜佐子の幼稚な頑なさに反応するのを避けていた。詩真子の方は話せば話は通じた。(つづく)

重信房子さんを支える会とは

重信裁判は、「パレスチナ解放闘争との連帯を起点に、日本社会の変革を迫及した日本赤軍兵士の重信房子さん」にかけられた、長期勾留を目的とする政治裁判と言えます。その為、公正な裁判を求め、社会の不正に疑問を持つ有志が集まり、「重信房子さんを支える会」として、01年4月より救援活動を始めました。

重信公判の争点は三つあります。

- ① 74年にOさんが日本出国のために使ったとされる旅券偽造。
- ② 74年、フランスで不当逮捕されたメンバーの奪還作戦として闘われたオランダ、ハーグのフランス大使館占拠での逮捕監禁・殺人未遂。
- ③ 00年の逮捕時に使っていた旅券偽造。

重信さんは、③は認めていて、関係者に機会あるごとに謝罪を表明しています。しかし、①②については、全くの無実として争っています。

私たちは、運動の柱を次の2点に定めました。

- ① 裁判維持に必要な救援実務とカンパ集め。
 - ② 世直しを求める人々との語り合い、交流の場をつくる。
- 「オリーブの樹」は、この目的のために発行しています。

次回公判日程

丸岡さんへの証人尋問が追加されました。()内は、証人名です。敬称略。

2月18日(火) 13時15分 (丸岡 修)	3月12日(水) 10時 (ライラ・ハリド)
3月14日(金) 10時 (ライラ・ハリド)	4月18日(金) 13時15分 (丸岡 修)
5月13日(火) 13時15分 (丸岡 修)	5月27日(火) 13時15分 (丸岡 修)

東京地裁 (最寄り駅 地下鉄 霞ヶ関) 104号法廷

傍聴券の配布は、開廷の20~40分前です。法律を学んでいる学生が単位を取るために傍聴に来て、満席になることがあります。確実に傍聴を希望する方は、早めに地裁前に集合される方がいいでしょう。

後記

重信さん以外の原稿の集まりが悪くて、発行が遅れました。でも、多様な原稿が集まって、内容が充実してきたのではないかと自賛しておりますが、頁を増やさなくてはなりませんので、担当のどたばたは相変わらず。さらに、印刷まで自分でやると請け負ってしまったものの、初めてのことで、その見透しには不安定なものがあります。この後、印刷作業という新しいことに挑戦です。何かが起こらないことを祈っていますが、何かが起こった場合は、どうぞ寛容にご容赦くださいませ。前号は、重信さんにも年内について良かった。次号から、今号の遅れを取り戻すようにします。

イラクに戦争が始まるのか？プッシュは、何が何でも戦争を開始したいようです。深刻な国際情勢に直面しています。戦争を阻止する為に、私たちに何ができるのか？微弱たる力からでも、あきらめることなく、その道を共に造り出していかなくてはと、心に誓うこのごろです。

今年は、例年になく寒さが厳しく、悪質なインフルエンザが流行っているようです。どうぞ皆様からだには十分に気をつけて、無理の無いように頑張ってください。(Y)

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋 2-8-16 石田ビル 4階
救援連絡センター気付 「オリーブの樹」事務局
郵便振替 00110-4-613941 オリーブの木
銀行口座 三井住友銀行 十条支店 809-3687269 オリーブの樹

